

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：14303

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K01999

研究課題名(和文)ハイデッガーと京都学派を軸とする「場所的 情意的知」の検討

研究課題名(英文) A philosophical approach to "the topological-affective knowledge" on the ground of the philosophy of Heidegger and Kyoto-school

研究代表者

秋富 克哉 (AKITOMI, KATSUYA)

京都工芸繊維大学・基盤科学系・教授

研究者番号：80263169

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：ハイデッガー哲学と京都学派とりわけ西田幾多郎と西谷啓治の哲学を、「場所的 情意的知」という共通の観点から捉え、相互に比較対照することで、各哲学的立場の特性を考察し、さらに現象学的運動の展開と照らし合わせながら、現代における哲学知の可能性を探ることを試みた。本研究の独自性は、国内外で注目されているハイデッガーと西田両者の思想を、あえて共時的に突き合わせる点にある。また、西谷哲学は前二者に比べると研究が遅れているが、申請者の研究が嚆矢となる可能性を持っていると自負している。

研究成果はすべて、日本語、ドイツ語、英語による論文や発表で公開し、毎年ドイツに出張して研究者との交流に努めた。

研究成果の概要(英文)：I characterized both the philosophy of Martin Heidegger and that of the representative philosophers of Kyoto-school, Kiraro Nishida and Keiji Nishitani as the "topological-affective knowledge" common to them and tried to consider their own originality, interpreting their texts, and find possibilities of their thoughts in the present-day comparing with the development of the phenomenological movement.

The philosophy of Heidegger and that of Nishida are now widely researched both at home and abroad, but my unique view lies in the synchronic comparison of the both philosophies. Compared with them, the research in the philosophy of Nishitani is rather behind. But I am confident that my research can take the lead in arousing researches in the the philosophy of Nishitani.

All the results have been presented through written papers, books and presentations in Japanese, English, and German. Every year I made a research trip to Germany to interact with foreign researchers.

研究分野：哲学

キーワード：場所 情意 ハイデッガー 京都学派 西田幾多郎 西谷啓治 現象学

## 1. 研究開始当初の背景

研究開始当初における当該課題をめぐる一般的な状況と申請者の状況に分けて説明する。

### (1) 一般的な研究状況

本研究が主題に掲げるハイデッガーと京都学派の哲学は、いずれも国内外で研究が盛んに展開しているものである。ハイデッガーについては、『黒ノート』の刊行により政治的文脈での議論が強まったが、哲学研究も相変わらずである。一方、京都学派についての近年の研究傾向として注目すべきは、従来の西田は言うまでもなく、田辺・和辻・九鬼・西谷・三木・木村・唐木など、個別の思想研究が広がりを見せ、しかも外国人研究者の注目を集めていることである。そのようななか、上記京都学派の思想家たちはその多くがハイデッガーの影響を強く受けているだけに、そのような観点を踏まえて個別の主題を取り上げた研究も散見される。しかし、そもそもハイデッガー哲学と京都学派の出発点である西田哲学をそれぞれの根拠に戻して、ないし哲学的背景を踏まえて、そこから両者を突き合わせて現代の問題を探る研究は、十分に着手されていない。

### (2) 申請者の研究状況

申請者は、2012年度より3年間、基盤研究(C)として、「ハイデッガー、西田、西谷の「場所論的思惟」の立場からする「技術知」の検討」を実施し、上記三者の哲学的立場について、それぞれの「場所」論的思惟の特色を照らし出すとともに、かつそこから技術という現代的なテーマがどのように理解されるか考察した。ただ、技術論についてはもともとそれ以前からの関心事でもあり、三者の技術論を比較対照する研究も広く実施し、一定の成果を発表してきた。しかし、もともとその前提になるはずであった「場所」論的思惟の考察が、当初予想していた以上の内実を持つことが判明、とりわけ西田と西谷の思惟を改めて京都学派の伝統のなかに位置づけてその基本的立場を掘り下げる必要を感じ、今回の申請となった次第である。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、大きく以下の3つの方向に分けられる。

### (1) それぞれの哲学的研究

ハイデッガーと京都学派(特に西田幾多郎と西谷啓治)それぞれの思想を、近代的主観性の立場の克服という観点から「場所的知」として捉え、しかも各々の哲学知が論理的反省知を基礎に据えつつ、独自の仕方では気分ないし情意の位置づけを含んで成り立っていることを明らかにする。

### (2) 両哲学の比較対照、および総合

双方の「場所的 情意的知」において、ハイ

デッガーの「気分」、京都学派の「情意」それぞれを含んで成り立つ双方の場所論的思惟を「世界」概念を軸にして突き合わせる。

### (3) 現象学の新しい可能性

ハイデッガーの現象学的立場を後期まで拡張して捉えることで、改めて現代における現象学の可能性という観点からその思索の意義を位置づける。一方、京都学派の哲学を、西田と西谷を軸としつつも、その他の思想家をも取り込みつつ、現象学という観点から可能性を探る。

## 3. 研究の方法

### (1) テキスト読解

研究の基本は、関連哲学者の原典テキストの読解である。哲学テキストゆえに、どこまで読めばよいというようなものでないことは言うまでもなく、ハイデッガーについても京都学派の主要思想家についても、ある程度の読解は積み上げているとは言え、まだ目を通していないものが少なくないため、まずは本研究の主題を軸に、関連するテキストの読解と再検討が中心となる。とりわけハイデッガー全集の新刊は、出版されるごとに内容を検討することが不可欠である。

### (2) 関連研究の情報収集と読解

本研究が主題とする哲学は、1でも記したように、程度の差はあれ、新しい研究や特集雑誌等が次々に刊行中であり、先行研究も少なくない。よって、それらを収集し、検討することが(1)に継ぐ方法となる。特に、京都学派の思想については英語文献の出版が著しく、またネット等で配信される研究にも注目すべきものが少なくない。それらにも常時注意を払うことが求められる。

### (3) 研究成果の公開

研究成果は、そのつど日本語と外国語での論文や口頭発表を通して、積極的に公開に努めていく。

## 4. 研究成果

### (1) ハイデッガー研究の社会的発信

左記1(2)で述べた科研基盤研究(C)の成果として、国内の研究者との共同編集で『ハイデッガー読本』(法政大学出版、2014年)を公刊したが、すぐに再販を出すなど、学界のみならず広く社会にも受け入れられた。その続編として『続・ハイデッガー読本』を共同編集し、公刊した。申請者自身、巻頭の総論的なものを含め、2編の論考を掲載した(図書)。

### (2) ハイデッガーと西田の比較考察

「ハイデッガーと西田」という主題は、今後西洋と日本の思想交流のなかで重要度を増すことが予想される。国内でわずかに見られる先行研究では、時代的制約ゆえに十分ながらも西田がハイデッガーに触れている箇所

をもとに、その批判を検討しながら両者の関係を扱うという手法が中心であった。しかし、本研究では、先行研究との違いを出すため、両者の哲学的出発点のうち強く重なり合う思想的契機を見出し、言わば両者の思想的展開を同時進行的に対照させる記述を選び、思想的対決を徹底することで見えてくる哲学的共通点と相違点を照らし出そうと試みた。その際、あくまで両者の「場所的 情意的知」ということに留意し、双方向的に考察を進めながら3回に分けて発表した。未完のプロジェクトとしてなおも継続中である。

また、その過程で、両者の思想を「世界」思想という観点から比較対照する論考の執筆依頼を受け、哲学と国際政治を論じる論集に投稿した(図書、雑誌論文)。

(3) ハイデッガーと京都学派思想家の比較  
京都学派思想家のうち、三木清と西谷啓治は共に西田の弟子ながら、哲学的には対照的な立場を展開したと見られている。しかし、同じくハイデッガーのもとに留学した両者は、その強い影響のもとに独自の思想を展開したという共通性を持つ。申請者は、その共通する主題として、アリストテレスと構想力という2つを取り出し、しかもそれがハイデッガーとの連関を持つことを明らかにした。この研究は、ハイデッガーと西谷・三木を比較検討することを通して、その背後にハイデッガーと西田という主題を透かし見るという性格をも持っている。

また、「ハイデッガーと西谷」というテーマについては、ハイデッガーとの対決という意味を強く持っていると思われる西谷の名著『宗教とは何か』をもとに、後期ハイデッガーの思想と突き合わせ、とりわけその後期思想の現象学としての可能性を取り出すことを試みた(図書、学会発表)。

(4) 西谷哲学の研究  
西谷哲学にとって「悪」の問題は、最初期からの根本的テーマである。それは、カントの根本悪やシェリングの自由論との対決を経て、中期以降のニヒリズムの問題に展開し、さらに後年の名著『宗教とは何か』をも貫いていくが、その主題化と密接に結びつくのが構想力の問題である。この二つの主題がどのように結びついて西谷の哲学的立場を作り上げて行くか、西谷哲学への取り組みがまだそれほど一般化していないだけに、未解決の主題になっている。申請者は、そのことを踏まえ、まずは初期の宗教哲学論考や神秘主義論考をもとに考察を進めた。もともとの学会発表では神秘主義の面を強調したが、それを元にした雑誌論文では、構想力の哲学的意味を表に出した(雑誌論文、学会発表)。

(5) ハイデッガーのギリシア悲劇論  
ハイデッガーのギリシア悲劇論は、以前から注目する主題として考察を続けているが、そ

の背景には、単に独立した悲劇論ということではなく、このプロジェクト主題としての「場所的 情意的知」との連関、および現代世界の中での悲劇解釈の必然性という観点が含まれている。成果として挙げたものは、もともと本プロジェクトの開始前年に依頼講演として発表したものを元にしたものだが、特に現代世界における人間の家郷喪失性ということを強調した。また、次の(5)で言及する寄稿済みのドイツ語論文は、ハイデッガーのプロメテウス(アイスキュロス)解釈を扱ったものであり、国内外でほとんど未着手のテーマである。本項目で掲げた申請者の研究課題にとって大きな意味を持っている(雑誌論文)。

(5) 欧文での報告と論文執筆  
雑誌等への掲載がなされていないこと、また論文として既に執筆・投稿済みであるが、まだ掲載予定の論集が発行されていないため、5の項目に挙げることは叶わないが、本プロジェクトでのドイツ出張の際、ヒルデスハイム大学で、西谷哲学についての日本の研究状況をロルフ・エルバーフェルト教授のゼミで報告した以外に、ハイデッガーの『黒ノート』についてのドイツ語論文を Heidegger Jahrbuch (Alber) に、また西田の場所についての英語論文を、Tetsugaku Companion to Nishida Kitaro (Springer) に起稿した。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)  
秋富克哉、「自覚・意志・直観 自由をめぐるシェリングと西田の一断面」、シェリング年報、第25号、査読無、2017、4-14

秋富克哉、「前期西谷啓治における悪と構想力の問題」、『立正大学哲学紀要』、第12号、査読無、2017、15-23

秋富克哉、「哲学の家郷 西田とハイデッガーの哲学的対話に向けて(3)」、『文明と哲学』、第9号、査読無、2017、139-152

秋富克哉、「哲学の家郷 西田とハイデッガーの哲学的対話に向けて(2)」、『文明と哲学』、第8号、査読無、2016、39-54

秋富克哉、「ハイデッガーとギリシア悲劇ソポクレス解釈をめぐって」、『アルケーン』、査読無、No.23、2015、41-54

秋富克哉、「哲学の家郷 西田とハイデッガーの哲学的対話に向けて(1)」、『文明と哲学』、査読無、第7号、2015、196-207

〔学会発表〕(計3件)

秋富克哉、「自覚・意志・直観 自由をめぐるシェリングと西田の一断面」、日本シェリング協会第25回総会・大会、2016年7月3日、京都産業大学(京都府京都市)

秋富克哉、「前期西谷啓治における構想力と悪の問題」、立正哲学会シンポジウム、2016年7月18日、立正大学(東京都品川区)

秋富克哉、「世界ともの 後期ハイデッガー現象学と西谷宗教哲学」、明治大学人文科学研究所主催「現象学の異境的展開」シンポジウム、2018年3月17日、明治大学(東京都千代田区)

〔図書〕(計2件)

秋富克哉他、『統・ハイデガー読本』、法政大学出版局、全406頁、2016

秋富克哉他、『日本発の「世界」思想』、藤原書店、全384頁、2017

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：

取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

秋富克哉 (AKITOMI, Katsuya)  
京都工芸繊維大学・基盤科学系・教授  
研究者番号：80263169

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：

(4) 研究協力者

( )